比叡山延暦寺の近世・近代における伽藍の新陳代謝

はじめに　奈良文化財研究所では2011年度から２ヵ年にわたり、比叡山延暦寺の全山建造物調査をおこなった。その結果、織田信長の焼き討ちからの具体的な復興や近代における造営の様子が一部、あきらかとなった。これらの要素は現在の延暦寺の伽藍に大きな影響を与えていた。詳細は既刊の『比叡山延暦寺建造物総合調査報告書』（比叡山延暦寺、2013）を参照されたい。

三　塔　延暦寺は東塔・西塔・横川の三塔と二別所（黒谷・安楽谷）によって形成される。東塔が延暦寺全体の中心であるが、三塔はそれぞれ中堂を有し、各伽藍は一定の広さを有する。これの三塔の建物を対象に、焼き討ち以降の造営と修理を通して、延暦寺の近世・近代の伽藍の新陳代謝について言及したい。

時期区分　延暦寺の建築を語るうえで、元亀２年（1571）の信長による焼き討ちが画期である。この焼き討ちは延暦寺における中世までの造営の終焉であると同時に、その復興は近世の造営の幕開けであった。この復興を契機とみると、江戸時代から戦前を以下の５時期に分けることができる（表３）。現存遺構と対照させつつ、この時期区分について順に述べよう。

Ⅰ期：近世第一次復興期（元亀～寛永11年）　焼き討ち以降、信長の存命中には延暦寺の再興はなされず、信長の死後、豊臣家と徳川家によって、復興が徐々に進んだ。

この復興により、西塔・横川では主要建物の多くが再建され、以前の姿を取り戻しつつあった。しかし東塔には根本中堂や戒壇院の仮堂が建てられた程度で、本格的な復興は徳川家光と天海の助力を待たねばならなかった。

これらの再興した堂舎も寛永８年（1631）の暴風によって、根本中堂・講堂・戒壇院・文殊楼・常行堂・法華堂・四季講堂など、三塔の主要な建物は倒壊した。

Ⅱ期：近世第二次復興期（寛永11年～延宝年間）　この時期は徳川家光と天海による東塔の復興が主たるものである。寛永８年の暴風による被害は甚大で、横川中堂・常行堂・法華堂・瑠璃堂など、ごく一部の建物が被害を免れたにすぎず、焼き討ち以降の再興が水泡に帰した。この状況を憂慮した天海は将軍に諸堂の再建を要請し、寛永11年（1634）の徳川家光の上洛にともなって、この願いは聞き届けられた。そして寛永19年（1642）には、根本中堂・大講堂・文殊楼などの東塔の主要な堂舎が、幕府の力で再建された（御用作事）。これらの御用作事により、東塔の復興が名実ともに開始したのである。

Ⅱ期の造営は東塔の主要建物に集中している。特に徳川家光と天海による根本中堂などの寛永期の造営から浄土院（最澄の霊廟）・戒壇院の造営は、一連の御用作事による東塔復興であり、現在の伽藍の主要な堂舎の多くがこの時期までに築かれた。すなわち戒壇院の完成は、東塔のみならず、Ⅰ期に整備された西塔・横川とともに三塔全体の伽藍が復興したこと、言い換えれば近世延暦寺の伽藍の基本的な構成が完成したことを意味するのである。

Ⅲ期：維持管理体制の確立期（天和～18世紀）　主要建物の整備が完了したⅢ期には、造営の対象は周辺建物に移っていった。西塔・横川の鐘楼・赤山宮といった比較的小規模な建物や椿堂・山王院・不動堂といった塔の下部に所属する各谷の本堂建築である。

Ⅲ期に造営された建物は比較的小規模であるため、Ⅱ期建物が延暦寺全体の歴史的景観に与える影響は小さい。しかしその中でも西塔・横川の鐘楼は「延暦寺型鐘楼」ともいうべき、独特の意匠を示しており、注目に値する。なおⅢ期にも徳川幕府による御用作事は継続しており、主要建物の継続的な修理の基盤ができあがったのである。

Ⅳ期：近世的造営の終末期（19世紀～明治前期）　19世紀に入っても、新造は限定的で、維持管理が造営の中心であった。なかでも最も大規模なものは文化８年（1811）の修理で、四季講堂を筆頭として、横川の諸堂12棟、東塔の大講堂・伝教大師御廟、西塔の転法輪堂が修理された。

幕末から明治初頭には延暦寺も争乱・廃仏毀釈・社寺領の上知の影響を受け、新たな造営はなされなかった。維新後初の大規模な造営としては、坂本滋賀院の再興がある。明治10年（1877）に滋賀院は焼亡し、明治13年（1880）に山上の建物を移築した。この際に新造された勅使門の手法や意匠は近世を継承したものであった。近世的手法は明治期まで継続していたが、明治27年（1894）の無動寺谷明王堂の再建が、その終焉であった。

Ⅳ期は社会の混迷の影響を受け、修理・新造ともに活発な時期とは言い難い。廃仏毀釈の影響から脱却した時期には近代化の波を受け、近世的造営は終焉を迎えた。

表３　延暦寺の主要建物の造営・修理に関する年表

	年代	東塔	西塔	横川	その他・備考
Ⅰ期	天正12年(1584)			横川中堂	
	天正13年(1585)	根本中堂	転法輪堂(仮設小堂)		
	天正年中	戒壇院		食堂・横川鐘楼・四季講堂(家康)・経蔵(家康カ)・四脚門・元三大師御廟拝殿・甘露山王社・不二門	
	天正カ	浄土院			
	文禄4年(1595)		常行堂・法華堂・転法輪堂(移築)		生源寺
	慶長之初		相輪樘		
	慶長9年(1604)			横川中堂(淀君)	
	慶長18年(1613)				青龍寺本堂
	寛永8年(1631)		相輪樘		大風被害
Ⅱ期	寛永11年(1634)				徳川家光上洛
	寛永17年(1640)			元三大師御廟拝殿	
	寛永19年(1642)	根本中堂・文殊楼・大講堂・鐘楼・明王堂(移築)			
	寛永年中	戒壇院・政所(大黒堂)・前唐院			
	正保3年(1646)				慈眼堂
	慶安2年(1649)	山王社			
	慶安年中			不二門	
	承応元年(1652)			四季講堂	
	承応年中			四脚門	
	万治4年(1661)	浄土院			
	寛文元年(1661)			赤山宮	
	寛文4年(1664)		恵亮堂		
	寛文8年(1668)	根本中堂・大講堂・鐘楼・文殊楼			
	寛文年中		西塔鐘楼		
	寛文カ	政所(大黒堂)・前唐院			
	延宝元年(1673)			横川中堂	
	延宝4年(1676)			不二門	
	延宝年中	戒壇院			
Ⅲ期	天和3年(1683)	山王院			
	貞享4年(1687)		転法輪堂・常行堂・法華堂・西塔鐘楼・相輪樘	横川中堂・食堂・横川鐘楼・赤山宮	
	元禄元年(1688)				青龍寺本堂
	元禄10年(1697)			不二門	
	元禄16年(1703)	根本中堂			
	元禄17年(1704)		椿堂		
	元禄年中			執事所・甘露山王社	
	宝永初			三十番神社	
	宝永3年(1706)	根本中堂・大講堂・鐘楼			
	宝永7年(1710)				生源寺
	宝永カ	文殊楼・政所(大黒堂)・前唐院			
	享保5年(1720)			不動堂	
	享保9年(1724)			四季講堂	
	享保年中				生源寺本堂
	寛保元年(1741)	根本中堂・大講堂・鐘楼			慈眼堂
	寛保2年(1742)		相輪樘		
	寛保3年(1743)			四季講堂	
	寛保カ	文殊楼・政所(大黒堂)・前唐院			
	宝暦3年(1753)	根本中堂・大講堂・鐘楼・戒壇院		不動堂	
	宝暦4年(1754)			四季講堂(3月・9月)・元三大師御廟拝殿(3月)	
	宝暦11年(1761)	大講堂	転法輪堂	横川中堂	
	安永10年(1781)	文殊楼・政所(大黒堂)	西塔政所・常行堂・法華堂・相輪樘	四季講堂・元三大師御廟拝殿・不二門	滋賀院・慈眼堂
	天明カ	前唐院			
	寛政10年(1798)	根本中堂			
Ⅳ期	文化8年(1811)	大講堂・伝教大師御廟	転法輪堂	四季講堂・経蔵・元三大師御廟拝殿・不二門・横川鐘楼・四脚門・赤山宮・甘露山王社・三十番神社・龍池社・中堂御供所・四季講堂御供所	
	天保2年(1831)			四季講堂雛足院	
	明治13年(1880)				滋賀院表門・勅使門
	明治15年(1882)			四季講堂	
	明治23年(1890)	根本中堂			
	明治27年(1894)	明王堂・明王堂鐘楼			
Ⅴ期	明治28年(1895)		相輪樘		
	明治41年(1908)				滋賀院内仏殿(移築)
	大正10年(1921)	浄土院表門・拝殿・伝教大師御廟			
	大正14年(1925)			根本如法塔	
	昭和3年(1928)	大書院(移築)			
	昭和11年(1936)	戒壇院			
	昭和12年(1937)	阿弥陀堂・阿弥陀堂政所			

＊『天台座主記』(第一書房1973年所収)・「東塔五谷堂舎並各坊世譜」・「西塔堂舎並各坊世譜」・「横川堂舎並各坊世譜」(『天台宗全書第二十四巻』第一書房1974年所収)、二次調査によって得られた棟札等の資料、「近世巨大寺院造営と幕藩権力」(光井渉『近世寺社境内とその建築』中央公論美術出版2001年所収)をもとに、年代がある程度明らかなものを対象に作成した。
＊ゴシック体は新規造営とみられるもの、明朝体は修理や改造とみられるもの、アミカケは三塔の大規模な造営や修理を示す。

Ⅴ期：近代復興期（明治後期～戦前）　明治初頭の廃仏毀釈などの苦難を乗り越えた近代の復興では、山外と同様に、古社寺修理技師による復古様式、移築、庭園と建物の関係性の密接化、開放性という近代和風建築の特徴が際立つ。

Ⅴ期には同時代の近代和風建築と同様に、復古様式による造営や建物と庭園の密接な関係が窺える。さらに安井楢次郎・山口玄洞らは修理の対象を未指定のものとし、裾野の広い修理をおこなった。こうしたⅤ期の復古様式による造営と修理により、近代化によって景観が一変することなく、歴史的な環境が保持された。一方で、近世以前にはない趣向を凝らした庭園が作られるなど、新しい風も延暦寺に吹き込まれたのである。

まとめ　信長の焼き討ち以降、延暦寺は継続的に造営・修理を繰り返してきた。焼き討ち～慶長期には豊臣家の助力、寛永～寛文期には徳川幕府による再興があり、これにより現在の伽藍の主要な建物が整備された。その後も江戸時代を通じて、徳川幕府の援助がみられた。

明治初頭には、諸寺と同様に延暦寺も廃仏毀釈の苦境にあったが、その後、良質な近代和風建築の移築や復古様式による造営により、歴史を保持しつつも、新たな延暦寺の伽藍が形成された。

このように歴史的建造物の修理・維持と移築や復古様式の導入という、新陳代謝を繰り返した結果として、現在の延暦寺の歴史的景観が形成されたのである。**（海野　聡）**